

後藤新平、大谷光瑞との出会い

王 鍵

わが日文研創立三〇周年を迎えて、日文研在籍時期での楽しく且つ有意義な日々をありありと思い浮かべている。私には日文研のある桂坂は浮き世を離れた別天地の感があり、「地上の楽園・世外桃源」に深く感銘する所である。ここでは鳥がさえずり花が香る真夏もあり、所内各所で紅葉が見られる晩秋もあった。歴史と現実が「溶け合う」所であり、歴史人物とわれわれ現代人が「出会う」所でもある。いつも忘れがたい懐かしいわが日文研である。

在籍中の研究テーマは「後藤新平の植民地経営思想——科学哲学史からのアプローチ」であった。賢者たる劉建輝教授より助言を賜り、台湾、満州における植民地経営策の策定において中国固有の風習、いわゆる「旧慣」に準じて植民地統治策を策定した後藤新平の植民地経営思想の特性を科学哲学史の立場からアプローチし、官僚後藤新平と民間人大谷光瑞の事績を比較してみた。貴重史料に富んだ日文研図書館で空間を越えて多くの日本の歴史人物と接近したのは忘れがたい。

後藤新平はドイツ留学後、内務省衛生局長を経て台湾総督府民政長官となった。後藤新平の台湾経営の理念は「生物学的植民地論」として知られている。日本の慣行、組織、制度を台湾に適応するよう工夫しながら植民地経営を行うというもので、武断型の植民地支配とは一線を画する経営思想だった。「旧慣」に見合うような制度的工夫をしなければ、優れた台湾経営な

ど不可能だという思想の持ち主が後藤新平だった。彼はその思想を「鯛の目と比目魚の目」の比喩で語り、後藤新平の台湾開発は日本の「開発学」の原点でもある。

台湾社会の実状を深く把握した後藤新平が統治の効率的な住民組織「保甲制」を警察補佐組織として設置し、旧慣制度と土地人口調査、伝染病予防、縦貫鉄道（道路）・高雄基隆港建設などの「台湾経営」を勢い込んで展開した。歴史には断続性と一貫性が交錯している。後藤新平が台湾統治初期に試みた事業で収めた成果は、元台湾巡撫の劉銘傳によって着手され未完に終わっていた土地・人口調査事業を完成させたことだった。劉銘傳が完成できなかった土地調査事業を後藤新平は鉄腕を振るって、わずか半年で終了させた。土地調査を通じて全島の耕地面積・地形が確定され、地租徴収の基盤（総督府財政の基盤も）が整えられた。後に林野調査事業を実施し、全島の山林地帯の面積・地形も確定された。一九〇三（明治三六）年には「戸籍調査令」を下し、日本でも実践していなかった近代的「人口調査」を行った。ほかに台湾銀行の設立と台湾貨幣の統一に従い、台湾植民地経営の基礎は急速に整えられた。

後藤新平の「台湾経営」の特徴の一つは、優れた人材を集めたことにある。たとえば京都帝國大学教授岡松参太郎を台湾総督府臨時台湾旧慣調査会部長に招聘した。また札幌農学校で教鞭を執っていた新渡戸稲造を糖業改良のため総督府糖務局長に招聘した。『武士道』を書き上げた新渡戸稲造は、後藤新平の強い支持を受けて、ハワイから砂糖黍を導入し品種改良を加え、さらに搾糖の技術を革新して台湾製糖業の近代化を進めた。また総督府技師である磯永吉が日本米と台湾米の交雑実験を繰り返して、「蓬莱米」という品質でも単収でも当時の東アジアにおける画期的な新品種を開発した。同じく台湾総督府技師の八田興一も台湾中南部の嘉南ダムを一九〇年余をかけて完成させ、嘉南農地がだいぶ豊穰になった。台湾を悩ませてきた「熱帯疫病」

も後藤新平により予防接種が義務化され、鉄筋コンクリート製の上下水道が敷設されたことによって退治できた。まだ医師を養成する台北医学校（現在の台湾大学医学院）が創設された。

日露戦争後、後藤新平は「満州経営梗概」を提出し、台湾総督府民政長官を辞め、「満州鉄道株式会社」総裁となる。後藤新平は多数の台湾経験者（たとえば岡松参太郎が満鉄東亜経済調査局長を兼任）を満州に連れて、旧慣調査の理念、方法を同地に持ち込み、いわば「満州経営」は「台湾経営」の延長線にあった。結果、満鉄は鉄道経営にとどまらない巨大総合コンツェルンとなった。まとめると、後藤新平の台湾および満州経営の理念が生んだ、いわば植民地遺産をプラスとマイナスの両面に捉え、プラスと思われる部分もいったん客観化、対象化し、あくまで現代を生きる一「方法」として活用してゆかなければならないと私は考えていた。

ほぼ同時期、大谷光瑞のことも興味深く調査した。大谷史料を読みながら彼の聖域でもある西本願寺に十数回も訪問した。大谷光瑞（一八七六―一九四八）は、第二二世法主大谷光尊（明如上人）の長男で、後に大正天皇の皇后貞明皇后の姉九条壽子（かずこ）と結婚した。京都本願寺・浄土真宗本願寺派第二二世法主であり、宗祖・親鸞の法灯と血統を二つながら継承して他に誰も代わりうるものがない希有の存在であった。彼はその宗教的権威を活用し、台湾と満州など諸地域で文化活動を展開した。

一九〇四年満州で展開した日露戦争の勃発とともに、大谷光瑞は大連本願寺（関東別院）を創設した。柴田幹夫氏の『大谷光瑞の研究―アジア広域における諸活動―』によると、大連本願寺（関東別院）の創設、発展には、二つの要素がはたらいた。一つは、日露戦争に際しての従軍布教であり、もう一つは在留民社会に対する社会活動、教育活動である。大連本願寺（関東別院）内に各種の紳士会、婦人会や青年会を設置し、幼稚園や語学や女子の手習いのような

教育施設を設け、大連の日本人社会にとって、中心的な機能を果たした。すなわち宗教活動とリンクさせた社会活動・教育活動に特色があった。これが大連関東別院の不断なき発展に繋がったと思われる。当時、「大連に縁があるものは、すべて満鉄とも縁がある」といわれ、本願寺はその満鉄の大株主でもあった。大谷光瑞はしばしば満鉄本社で講演し、満鉄読書会にも顔を出し、学生を満鉄の農業試験場などに送り込み、さらには満鉄が支援していた文化施設にも深く関与した。こうして大谷光瑞は、日露戦争後、大連関東別院の創建によって邦人の社会的・精神的の中核となつたうえ、満鉄を介し高い社会的ステイタスを確保することに成功した。

台湾との関わりも深く、台湾を「我が帝国の如意宝珠」なりと形容した。一九四〇（昭和一五）年、本願寺「飛雲閣」の類似性を取り上げて台湾の高雄に「逍遙園」という農地の拡がる莊園を作った。「逍遙園」で学生向けの講義室、食堂なども完備されて、大谷光瑞は学生たちを率い、自給自足という集団農業に従事した。そこで彼も著作活動を精力的に行っていた。「農業」と「教育」を大谷光瑞が最も重視したものであったが、「満鉄」の関連もあつた「大谷光瑞興亜計画」や「欧亜連絡鉄道計画」なども模索していた。

総括すると、後藤新平の政策行動や大谷光瑞の民間行為から日本植民地経営の方向性をどのように行っていくべきかの模索が読み取れる。欧米諸国の例を参考にしながら、時代を率いるエリートたちの暗中模索が始まったばかりだった。後藤新平が台湾と満州で実験の意味も帯びて大規模な旧慣調査と施策を断行したが、今や彼とその主観的な意図とは無関係に実に膨大且つ貴重な学術的遺産が残された。後藤新平記念館（岩手県奥州市水沢）、国会図書館、日文研、台湾文献館、台湾図書館（元総督府図書館）、中国吉林省社会科学院満鉄資料館などに後藤新平文書を含め、貴重史料が数多く所蔵されている。そして日本、米國、中国大陸及び台湾学界に

おいて後藤新平研究（満鉄研究、日本統治時代台湾史研究など）がますます重要視されている。

大谷光瑞は仏蹟の発掘を念頭において、生涯の使命とする西域探検、調査活動を何回も続け、「探検収集品」を数多く納めた。今や大谷コレクションは、中国・旅順博物館、韓国国立中央博物館、東京国立博物館、龍谷大学などで分蔵している。西本願寺別府別院内に大谷記念館も開設し遺品などを展示している。特に旅順博物館に「大谷探検収集品宝庫」には、大谷探検隊の第三次探検がトゥルファンで発掘したミイラなども所蔵している。また、旅順博物館も満鉄物産陳列所として一九一五年一月開館したが、一九一七年四月関東都督府満蒙物産館に改称し、また一九三四年二月旅順博物館に改称した。一九五二年一月には、旅順歴史文化博物館に改称した経緯もあった。

日文研のおかげで後藤新平と大谷光瑞との出会いは実に楽しく、二人に魅力を感じた。今のわれわれとしては、如何に歴史人物が残される文化遺産を客観的に位置付け、それらを学問的に活用して初めて社会科学研究を進められると思う。いまだに「科学的政治家」と称される後藤新平が行ったのは、植民地経営するための「科学的行為」しかない（広重徹『科学の社会史』中央公論社、一九七三）とも言える。後藤新平と大谷光瑞の台湾活動と満州活動が今の時代にとって何であったかを問い返し、そして社会科学研究者の立場でそれを客観的に位置付ける必要がある。いかなる歴史にも「欠陥と遺憾」を残すのは普通であるが、「未来と希望」を見出すことがわれわれのやるべきことであり、責任と義務でもある。

終わりに日文研の皆様及び劉建輝教授へ深く謝意を申し上げます。

（中国社会科学院近代史研究所研究員、大学院教授）